

芹沢光治良

第六卷・結婚

人間の運命

人間の運命

第六卷・結婚

芹沢光治良

人間の運命

第六巻 結 婚



昭和 39 年 9 月 26 日 印刷

昭和 39 年 9 月 30 日 発行

定価 400 円

著 者 © 芹沢光治良

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

東京都新宿区矢来町71

振 替 東 京 8 0 8

電話東京(260)1111~9

印刷・株式会社 金羊社 製本・神田 加藤製本所

乱丁本はお取替えいたします。

© by K. Serizawa, Printed in Japan

人間の運命

第六卷 結婚

第一章

次郎は古文書を調べているうちに、山村に関する知識のないことが、やりきれなくなつた。雪にうもれて、営林局に冬眠している間に、山村へ出張してみなければと、つくづく考えた。小作争議地へ出張して、農村を知つたように、山村を知るにも、実地に出張するのが早道だ。秋田県か山形県の営林署を通じて、山林担当官のいる山村へ出張してみよう、そう決心して、その日、山田林政課長に希望を申出た。

「雪のとけるのを待った方がいいよ。第一、春田局長代理が反対するにきまつているからね」賛成するものと信じた課長は、そうすげなく答えて、説明を聞こうともしなかつた。

次郎はその足で局長室へ行つて、直接局長代理に希望をのべて、許可をもとめた。春田は次郎の顔に鈍い目をおいて、黙ってきいているだけで、最後に、考えておこうと答えるなり、机上の書類に視線をおとした。

不許可と言う代りに、考えておこうと、狡く、答えたのであろう。頭の真中にまるく頭髪が薄く禿げているが、学窓を出て間もなく、松脂について博士論文にもなる研究発表をしたとい

う伝説は、その禿げに名残りをとどめているのであろうか、次郎は失望して、しばらく老技師を眺めながら立っていた。型のくずれた紺サージの背広に、瘠せた軀を包んで、顔色もさえない、どろんとした目をしているが、局長代理だぞと、肩をいからして、書類を見ている。学究的だという評判だが、そのおもかげはどこにあるのか。二十余年も、地方の営林局におると、こんな風に、人間は根こそぎ変えられてしまうのであろうか――

次郎は他人事でないおもいで、局長室を出た。それ故、その日は退庁時間の鐘と同時に、こんな役所には一分も余分にいられるものかというように、課長がいるのに、さっさと帰り支度をして、長靴にかえて外へ出た。相変らず垂れこめた空から、粉雪がおちていた。

役所を出ても、息のつけない北国の冬空だ。役所の門を出たところで、背後から事務官――と、大声で呼びとめられた。同宿の若い進藤^{しんどう}技手が追いかけて来た。スケート靴をさげている。いっしょに帰る仲間のあることだけでも、喜ばなければなるまい。

「森さんは十文七分でしたね。仲間から、これを借りられましたよ。スケート場の開場式が今夜だそうです。お伴しますから、これをはいて下さい」

城跡のお濠はもう凍っているが、毎年、秋田市はその一隅を市民のための野外のスケート場にして、雪をはらい、電燈その他の設備をするということだ。スキーをする人のないのを、次郎があやしむと、今にスケートができるからと、進藤は慰めたことがある。

「今夜から、毎晩スケートにご案内して、コーチしましょう。一週間もすれば、自由に滑れ^{すべ}ますよ。一月になると、林区担当官の講習がはじまって、スキーもできます。そしたら、雪の秋

田もすてたものじゃありません。四月には雪がとけて、いっぺんに花が咲き出して、山林関係の仕事をする者の幸福を、しみじみ感じますよ。あちこちの山村や山林を歩きまわって——」

東京から来て退屈であろうと、いつも心を配る進藤だ。盛岡高等農林出で、次郎の一つ年下だが、彼が同宿していたから、次郎はどれほど慰められるか知れない。

夕食をすましてから、進藤に促されて、スエーターを着こんで玄関へ出たところ、車櫓が着いて、局長代理の使者が次郎を迎えに来たというのだ。外出して留守だと答えるように頼んだが、使者だという車夫は、帰るまで待たしてもらうからと、玄関の式台に腰をおろした。次郎は進藤と顔を見あわせて、そのままお濠へ出掛けようとした。

「森さん、局長代理をことわると、あとにたりますよ」と、進藤が囁いた。

「川反^{かわぼた}で飲まされるなんて、閉口だからな」

「事務官としての義務かも知れませんか。行ってらっしゃい。スケートは、ぼくが下検分しておいて、あすの晩からできますから」

「約束もないのだし……二分あとに櫓が着けば、実際に留守だったからね。それに、櫓さえよこせば、喜んで飲みに来るものと思われているのが、いやなんだ」

「ノブレス・オブリージュ^{noblesse oblige}ってことがあるでしょう？ 事務官は営林局では貴族です。さあ、川反へ行ってらっしゃい」

「ノブレス・オブリージュだつて？ 酒の秋田で役人の修行をするってことか」

苦笑しながら、次郎は車櫓にのつた。そんな恰好で川反へ行くのですかと、若い技手は驚い

ていたが、一種の抵抗のつもりもあつた。

車轎のとまつたのは、いつもの料亭とちがい、同じ川反でも、下宿から遠くなくて、待合の
ような小さな構えの前だ。

春田は局長の外遊中に、局長職を代行していたが、役所で、昼にもめつたに高等官食堂へ顔
を見せない。元来、局長は事務官僚であるから、局長代理も事務官僚であるべきなのに、技術
家の春田が就任したことから、局内にくすぶっていた法学士と林学士との暗闘が、表面化した
という噂であつた。その証拠のように林学士の高等官（技師）も、高等官食堂へ現れるなり、
急いで、食事をすませて、事務官僚の高等官と殆ど口をきかない。次郎は靴を脱ぎながら、そ
の日の春田との交渉をふと思ひ出して、この呼び出しに、どんな意味があるか、大きく息をし
た。

春田は丹前姿で、床の間を背に、大きな炬燵にはいつて、三人の芸者をあいてに顔を赤くし
ていた。禿げあがつた額がてかてか光つて、これが局長室の陰気な局長代理か、改めて見なお
した。

「なんという恰好だ。君、一風呂浴びろよ」

「お濠のスケートへ行く途中、轎につかまつたものですから——」と、てれかくしに次郎も炬
燵にはいつた。

「風呂は風邪気味だから……お酒をいただきますしょう」

「その恰好では、こっちの酒がまずくなるな」

「それなら、こちらも丹前をもらいますか」

春田の横柄な態度に、次郎も袷かみしもをぬいがかかった。芸者のなかに、子鶴こづるがいて、すかさず丹前を次郎の肩に羽織らせた。春田は自ら次郎に酌をしながら、得意そうに言った。

「今日の君の話ね、承知したよ……さっそく木内きうちにプランをたてさせた。おい、木内を呼びなさい……、木内はわしの子分だ、事務官も目をかけてやって下さいよ」

木内は次郎の課の古参属だが、局長代理と飲んでいたらしく、丹前姿で赤い顔をして部屋にはいるなり、事務官と、両手をついてお時儀をした。

「ここでは局長も事務官もない。ただ同志あるのみだ。木内、遠慮せんで、炬燵にはいれ」

老属官は役所とは見違えて、春田より恰幅かみばちもよく、はきはきした態度で、彼の方が局長代理に見えた。炬燵にはいったが、芸者の扱い方もみごとだ。次郎はただ啞然とした。

「木内、さっきのプランを森君に話さんか」

「例年三月下旬にひらく山林会総会を、今年は一月の第二週に開催することにしました。総会には、例年局長が出席するので、事務官もそれに出席することにして、序ついででに一週間、ご希望の山村に出張なさるよう、手順をとります」

「森君、貴島局長は四月上旬帰朝するので、山林会の総会を早目にするんだよ。今年は山形県下で開催する番だが、山形県下の山林関係者も、前から一月を希望していたしね。事務官の出張というのは、雪の季節にはしない慣行だから、君の希望をいれるためには、山林会の総会を一月に開く以外にないからな。その点、ふくんでおき給え」

「雪の季節には、出張しないのですか。雪があればこそ調査ができるようなことが、実地にはある筈ですがね——」

「ぼく達技術家は、そう考えるが、行政官諸君はちがった意見のようだよ……森君がぼく達と同意見なことを知って、愉快だ。さあ話はすんだ。飲むうや。子鶴、お酌せんか」

芸者衆が酒をすすめた。木内は芸人がほうかん仲間かのように、自らしぐい喉をきかせたり、芸者にうたわせて、踊ったり、春田の長唄をひき出したりした。無芸な次郎は、酒を飲むより術がないが、いくら飲んでも酔わないから、辛かった。春田は時々うたをやめ、盃をおいて、次郎に営林局の内部を知らせようとするのか、局員の噂をした。山田林政課長をはじめ、高等官を一人一人人物評論して、最後に言った。

「森君、君が古文書を調べていることも知ってるよ。課員から熱心に聴取りをしていることもな……だが、明治初年に国有林が設定された時に、部落の慣行を無視した処もあって、部落民の権利を侵害しているようだが、その問題には、触れないという不文律ができているように言うが……そう言うのは、今日まで行政官諸君の怠慢からだだよ。この問題に触れれば、陳情になやまされて、面倒な仕事がふえるものと怖れているんだよ。行政官諸君は、民をおさえて、事が運べば、それでいいんだ。……だが、ぼく達技術家は、民といっしょでなければ、事が運ばんから、行政官諸君とは、一致できんのだ。だから、君のように民といっしょになろうとする行政官が、この雪深い秋田へ来たことが、嬉しいんだ。技術家はみんな、君の味方だよ、わかったかね。……なあ、木内、そうだなあ」

その意味が、酒のしみた次郎の頭には、よくわからなかった。賛成も反撥もできなかった。

ただ、役所で、わが部屋で木内が自分を監視していて、いちいち局長代理に報告していたことだけが、あきらかになった。役所では、仕事の関係上木内と交渉がなく、主として矢田属を相手にしていたが、矢田も恐らく自分を監視して、誰かに報告しているにちがいないと、すぐ頭に来た。その相手は、林政課長か林産課長か、または海外旅行中の局長にちがいないのだ。営林局という鼻糞のような小さい役所で、やれ技術家だとか、行政官だとか言つて、唾みあい、とるに足りない自分を、技術家側に引き入れようとするのだろうか——次郎はうとましくなつて、酔いつぶれたように装つて、その場に仰向けに寝てしまった。

「森君、別室に泊つていいんだよ。遠慮せんで——」

「それより、もっと歌をきかせて下さい」

そう言いながら、天井に目をおいた。美しい檜の一枚板だ。この家も局長代理が木材を斡旋して建てたのであろうか。女将のサービスも特別だ。春田は次郎がねむつたものと思つたのか、年増芸者に三味線をひかせて、長唄をうなっているが、木内もそばで他の芸者を抱えるようにして、声をあわせていた。

しばらくたつて、次郎は厠に立つような様子で廊下へぬけ出た。脚がよろめくほど酔つていた。子鶴がついて来た。玄関へ出ようとするのを、子鶴がむりに厠の方へ案内しようとする。羽織った丹前を子鶴の胸におしつけるなり、玄関に出て、わが靴を探して外へ出た。

宵のうちにちらついていた粉雪はやんで、風もない。雪雲に月がかかっているのか、雪路が

仄明るく光っている。人っ子一人見えなくて、凍った空氣が酔った頬にこころよかった。雪路は大きく揺れるようだが、ゆっくり左によるめき、右にもどりつ、歩いて行つた。

橋の上に出た。この木製の橋をわたれば下宿はもうじきだ。橋の欄干しんかんによりかかつて、大きく息をした。局長代理から待合に誘い出されたことが、無精に腹立たしかった。その上、聞かされた話が、むかむか胸につきあがつて来て、氣持も悪かった。指を口にいれて、重苦しい胸のなかのものを、吐き出そうとした。川のなかに、酒や食べた物がどろどろおちたが、胸につかえた不快な想いははれなかった。雪にうもれた川反の灯が、あちこちから橋の上へ追いかけて来るようだ。こん畜生！ と、その灯に向つて手を振りあげて叫ぼうとしたが、声が出ないで、あせっている時、突然背後から、女の声が出た。

「あんまりお酒をあがらない方がいいわ」

子鶴の幽霊みたいだ。独りぬけ出したつもりだが、女が袂をとって、あやうつかしい恰好で、背にふれそうに近く立っていた。ふり向いた次郎は仄かな甘い香で顔をうたれて、狼狽した。

「なんだ、子鶴君か、こんな処へ、どうして来たんだ」

「いやですわ。どんどん歩くんですもの、あたしは下駄の齒に雪がはさまって、転びそうでしたわ」

女は荒い息をして顔をよせるように近づけた。次郎はわざと欄干から顔を出して汚物を吐き出すようにした。

「ねえ、むりしてお飲みにならない方がいいわ。お酒はあまり好きじゃないんですもの」

「ぼくのは、かまわんでもらいたいな」

「だって……お苦しいんでしょう」

背中をなでおろすのか、不快な感覚が背に走った。次郎は跳ね上るようにして、向むかになつて歩き出した。

「森さん、待つてよ……そんなによろよろ歩いて、あぶないじゃありませんか。川におちたらどうします」

実際、次郎はよろめいて、橋の欄干にぶつかったりするが、逃げるような足取りだ。子鶴は下駄の齒に雪がはさまり、歩きにくくて、転びそうで、次郎に追いつけなかった。呼びとめるが、次郎は待つてくれない。足袋跳になつて、手に下駄をさげて、雪路を急いで次郎に追いつき寄り添うようにした。お座敷着の裾をもち、白足袋のまま雪路を歩く子鶴は、氣の狂つたように必死で、濃艶でもあつた。

「あの、春田さんてば、ずいぶん失礼なことを言うんです……今夜はここで森君といっしょに泊つて行けたなんて……あたし、芸者はしていても、お客と泊るような女じゃないって、言つてやったの。あんなお座敷は早く逃げ出したかつたわ……もう春田さんのお座敷なんか、出てやらないから——」

子鶴はかきくどくのか、そんなふうに懸命に話すが、次郎は聞いているのか、いないのか、反応のない様子で、よろめきながら黙々と歩いている。人通りがないから、どんなに道は遠くても

よかったが、屋敷のなかから、犬がしきりに吠えかけた。間もなく下宿の黒い門の前に出た。子鶴は潜戸を開けて、何かを待つようにふるえていたが、次郎はものも言わずに、潜戸に転げこむようにして、内側から、びたっとしてしまった。

翌日、次郎は役所へ出ると、局長室に呼ばれた。局長室には、局長代理の他に、木内が敬虔な態度で立っていたが、前夜の礼を述べるべきか迷った。しかし、春田は局長らしい威厳ですぐ言った。

「森君、山林会の総会は一月十五日に決定して、木内君に通達を出させることにした。それから、林区担当官の講習を一月二十五日からはじめることに決定したが、君も講義や指導をしなければならんから、例の山村の出張は、九日から十六日としたらどうか。その間、十五日の総会に出席して、十七日に帰ることにして、スケジュールは木内君と打合わせて、至急通達を出させるからね。どうか、異存はありませんか」

「林区担当官の講習というのは、どういうことですか」

「君に山田課長はまだ話さんのか。年々若い林区担当官を当営林局に招いて、担当官として必要な法律や心得を授けて、再教育するんだ。尤もこの期間には、盗伐も少ないし、担当官としては最も暇の時だから、秋田市へ呼んでねぎらう意味もあるがね。予算の関係で、毎年三十人ぐらいしか召集できないが、四年に一度ぐらい講習を受けることになるようだ。詳しいことは、課長から話があるだろうが、その講習で林区担当官に接すれば、山林の実情を知りたいという君の希望も、かなえられるかも知れんよ」

「その講習の準備があれば、出張して十七日に帰つては、二十五日からの講習には無理かも知れませんがね」

「しかし、九日前に出張することは、正月休みもあり、不可能だよ。随行の木内君だって困るからな……講習の準備といつても、君は講義だけだから、たいしたことはない。そうきめておき給え」

「はい」

前夜のことについては、局長代理も木内もけろつとした顔だ。ただの狸ではない。肚に力をいれて、次郎も知らん顔で局長室を出た。その夕、進藤とスケートにつれだつて行くにも、車轎が迎えに来るのを怖れて、早目にあわてて出掛けたが、何故こんなに宴会ばかりあるのだろうと、凍った雪路をふりかえりながら、ふと吐息した。若い次郎には、車轎で川反へ向う時よりも、城跡のスケート場へ歩く方が、心がおどつた。

「それなら、森さん、年末から正月休みには、秋田を逃げ出さなければいけませんよ。ぼくは毎年故郷の岐阜へ帰ることにしているけれど」

「折角の秋田へ来たんだから、休暇ぐらいはゆつくりスキーでもやりたいが、どうですか、休みに教えてくれませんか」

「林区担当官の講習の時には、スキーもやるから、いっしょに滑れますよ。林区担当官はスキーができなければ、冬山の監理ができませんからね」

「ぼくはスキーをしたことがないから、担当官といっしょには滑れないなあ。習いたいんだ。」

君は名手だそうじゃないの。正月休みに、逃げ出さないで、コーチしてくれないか。そしてら、講習の頃には、みんなといっしょに滑れるようになるだろう？」

「担当官たちが喜んでコーチしますよ。すぐ滑れるようになるから、安心していらっしやい。正月秋田にいたら、酒漬にされて、スキーどころじゃありませんよ」

「川反へ呼び出されたって、正月休みだからと、ことわればいいさ」

「森さんが本気に酒と女を嫌悪するなら、休暇中は逃げ出した方がいいですよ。昼間も、役所がないとなれば、子鶴ちゃんが修養会へ出るような顔をして、森さんの部屋にいりびたりになるかも知れんですよ」

「そんなことをして見給え、旦那に叱られるから、大丈夫だよ」

「旦那なんか……川の屋の秘蔵娘だもの、ありませんよ。子鶴ちゃんはね、O貴族院議員の落し子で、修行のために芸者に出ているそうですよ。森さんも要心した方がいいですね。……あの妓は森さんの宴会にしか出ないって、噂じゃありませんか」

「要心って、なんのこと？」

「あの妓と結婚しなければならなくても、いいですか」

「結婚だって……そんなばかな」

次郎は相手が驚くほど大きな笑声をたてた。しかし、次の日曜日のことであつた。珍しく青空がのぞいて、雪の上に陽がきらめいていたが、寒さがきびしくて、空中の水蒸気が微細な粉雪になつて舞っていた。あまり寒いので、次郎は進藤に誘われるまま朝風呂に、遠い川岸の新